

伝染性喉頭気管炎の発生事例について

千葉県北部家畜保健衛生所

○今関智恵、稲毛幹雄、※畑野克巳ほか

※現千葉県海匝農業事務所

平成 27 年 3 月に管内採卵鶏育雛農場の 1 鶏群（約 2 万 5 千羽）で、116 日齢の雛が 20 羽死亡したと通報があり病性鑑定を実施した。生体 3 羽及び死体 7 羽の病理解剖では気管内に赤色滲出物が、病理組織学的検査では、喉頭及び気管に充血、出血及び核内封入体を伴う合胞体形成が認められ、免疫組織化学的検査で 5 羽中 4 羽に伝染性喉頭気管炎（ILT）ウイルス抗原が検出された。6 羽の気管及び肺の PCR 検査で、4 羽から ILT ウイルス特異的遺伝子が検出され、特異的遺伝子陽性個体の材料を用いたウイルス分離では 1 羽から ILT ウイルスが分離された。

農場では ILT ワクチンを点眼またはスプレーで接種しており、当該鶏群はスプレー接種であった。点眼接種群では ILT が発生していない。本発生以後は、全群のワクチン接種方法を点眼に変更し終息した。出荷先農場については導入前にワクチン対策を講じ、ILT の発生はなかった。

本発生事例では、ILT の特徴的な症状とされる奇声、発咳、血痰排出等の症状はほとんど確認されず、開口呼吸等の軽度な呼吸器症状と死亡が主な症状であった。ワクチン接種が発症予防及び症状低減に効果があったと考えられると同時に、ワクチン接種方法が ILT 発生の一要因と推察される。